

主日のミサに来なさい。主日のミサに参加するのは信者の大切な務めです。主日のミサは他の何よりも大切なものです。主日のミサに参加しなければ大罪になります。そのままでは地獄に行きます。いくら声を大にしてもミサの参加者は増えない。それでもまだ同じことを繰り返している。しかも、ミサに参加している人にもそのようなことを言っている。▼小学生も高学年になると、塾やサークル活動が始まる。親も子どもも悩んで、結局、塾やサークルを選ぶ。日曜日に試験があったり、試合があったり、主日のミサに参加できない。中・高生になると、もっと忙しくなる。教会はそのように決断した方が悪いといつて、そのままにしている。社会状況が変わっているのに、教会ではミサの時間も内容も、何十年たっても変わらない。ひたすら「ミサに来なさい」といってばかりである。▼ある教会では堅信式を機会に、若者を対象にした主日のミサを月一回、土曜日の夜にするように決めた。自分たちで典礼を工夫し、役割分担を決める。いろいろな楽器で聖歌の伴奏を試みる。自分たちの言葉で祈る。塾や部活で日曜日に来られない学生、青年に声をかける。年長者も食事を作ったりしてこのミサをサポートする。▼予想通り、怒りにも似た非難の声が聞こえてくる。「そんなことをしたら、ますます日曜日のミサに来なくなる。甘やかしてはいけない」と。なぜもつと信者を、若者を信用できないのだろうか。ミサの素晴らしさを体験することが先決。そのため工夫は絶対に必要だと思っただけだ。(Y)

紀元二〇〇〇年の大聖年が近づいている。ある教会ではここの降誕祭と、来年の元旦と復活祭のミサに小教区の全家族が参加することを指して準備が始まった。▼信徒名簿の作成を終え、司祭は全家族(世帯)に向けて毎月手紙を送る。班長が責任をもって「手紙」と教区報を全世帯に配布する。主日のミサ、典礼を充実させる。教会学校では、ここのテーマを「ミサ」だけに絞り、月一回の「子ども」ともに交ざる「ミサ」をみんな準備していく。青年会(高校生を含む)を再開し、初めは親げくを図るために楽しい計画を立てて仲間を募る。教会は青年会のためにひと部屋を割り当てた。毎週木曜日は早朝のミサの代わりに午前十時からミサを行う。こうして、家族の中で一人だけの信者の便宜(ぎ)を図り、教会とのつながりを保つ。司祭は説教をよく準備する。聖書朗読もよく準備し、ミサの参列者によく伝わるように配慮する。子どもたちにミサがよく「見える」ように工夫するなど、やるべきことは山ほどある。こうして、すべてを主日のミサに方向付けてる。何よりも、ミサに来れない人、来ない人を温かく迎える心の準備が大切である。▼教会は「神に呼び集められた人々の集い」である。「家族」である。家族にはいろいろなメンバーがいる。そして、さまざま問題を抱えている。▼「カリヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか」(使徒言行録一・11)。じつと天を見つめて立っているのではなく、私たちが立っているその現実を今一度よく見なければならぬ。(Y)

洗礼を受けるきっかけはさまざまである。親が信者だったから。妻が、夫が信者だったから。ミッシェンスクールや幼稚園の関係で。友人から誘われて。いつも教会の前を通っていて、いつか入ろうと思っ、入ったら「出会い」があった。病気になる。本を読んで。映画を見て。ただ何となく、とか、いつの間にか、といったこともある。▼とにかく、何らかのきっかけで洗礼準備が始まる。準備を始めて洗礼に到るまでの過程もさまざま。そして、準備の仕方もある。教会が望む理想的な形で準備できる人もいれば、そうでない人もいる。決まったプログラムをきちんとこなせる人もいれば、そうでない人もいる。準備期間が長い人もいれば、短い人もいる。苦勞する人もいれば、何の苦勞もなく受洗する人もいる。さまざまあるとき、ある人から次のように言われた。妻と子どもたちが洗礼を望んでいるので、わたしも洗礼を受けたいと思う。わたしも神を信じたいと思っているし、実際、もう信じていると思う。家族は一つでなければいけない。信じていることも同じでないといけないと思う。神父様はどつして洗礼を受けたのですか。自分で受けたい、と言ったわけではないでしょう。信じたい、と言ったわけでもない。それなのに、何もわからないのに、赤ちゃんのときに洗礼の恵みを頂いている。わたしも洗礼の恵みを頂きたい。すべに。だめですか。▼神は「先行投資」をする。心もある。こころも復活夜祭に「いんな方」が洗礼の恵みを頂へ。(Y)

宇宙船が地球に帰還するとき、大気圏に突入する。一説では、その時がいちばん緊張する。▼大気圏に突入する「角度」というものがある。それが浅すぎると、水面に投げた石が飛び跳ねるように、宇宙船は宇宙の果てに向かつて飛んでいく。それが深すぎると地上に激突する。そのような事態が起こらないように、宇宙船は「軌道修正」をしなが、無事な地球帰還を目指す。▼今週の水曜日は「灰の水曜日」。四旬節が始まる。改心のためには「回心」しなければならぬ。回心は心を回すこと。神に心を向ける。そうすれば神が見えてくる。御子を贈ってくださった御父のこころ、御子の受難に示される愛、いつも私たちが支え励ましてくださる聖霊。神に心を回すと自分が見えてくる。神にふさわしくない自分、神のみ言に沿って生きていない自分、神に心を回すと「神」が見えて自分の心を改めざるを得ない。▼回心は、絶えざる「軌道修正」。天国への軌道を通っているかどうか、ときどき自分の位置を確認して、ズレていたら、修正しなければ…。回心をしないと、改心はできない。▼死の瞬間は、宇宙船の大気圏突入に似ている。しばらくの間、通信不能になる。うまくいけば通信再開。しかし、死は、その瞬間から音信不通になる。ずっと。人は死後、宇宙の果てに向かうのか、地上に激突するのか、それとも永遠の命に入るのか。イエスは天国への突入「角度」を教えてください。うまく入れるよう、四旬節の間に軌道修正をしておきたい。(Y)

毎年クリスマスが近づくと思い出す。四年前の深夜のミサ。福音朗読が終わって、説教を始めようとした矢先、聖堂の後ろの方から「クリスマスはキリストの誕生日じゃねえぞ」というヤジ(?)が飛んだ。この大声とともに、準備していた説教の内容もぶっ飛んだ。不思議とだれも後ろを振り向かない。頭の中は真っ白。ミサ参列者の同情に満ちたまなざしを浴びる。聖堂内に長い沈黙。「…そつなんです。きょうはキリストの誕生日ではありません。そのことをお話ししましょう」気が取り戻して説教を始めた。降誕祭はキリストの「誕生日」でないことはみんな知っている。降誕祭はキリストが生まれたことを記念する日。私のところに来てくださった「私の救い主」に想いを馳(は)せる日。▼キリストの誕生日は人によって異なる。既に、その人の心の中にキリストが誕生している人がいる。きょう、誕生する人もいる。これから、いつの日かに誕生する人もいる。降誕祭はそれを記念する日、その日を持ち望む日である。▼降誕祭前夜には三つのミサがある。三番目の深夜のミサ参列者の九割は信者でない方である。聖堂の前で見ていると、みんな当然のように、吸い込まれるように聖堂にキリストを礼拝しに入っていく。その姿には感動を覚える。昨年、から聖堂内に馬小屋を飾らなくなった。この日、聖堂そのものが馬小屋になり、参列者一人ひとりの心が馬小屋になる。▼不思議なこと、あの日の「ヤジ」はだれが飛ばしたのか、いまだに分らない。キリストの声だったのかも。(Y)